平成１４年　２月１５日発行

北海道国際理解教育研究協議会　会報

第５２号

会長　高橋　承造　　事務局長　真木　孝輝

不易なるものを求めて

北海道国際理解教育研究協議会
会　長　　高橋　承造
（札幌市立苗穂小学校長）

いよいよ本年の４月から、全国の小・中学校で一斉に、新しい学習指導要領が全面実施となります。

新しい学習指導要領では、基礎基本を確実に身に付け、それを基に自分の課題を見つけ、自ら学び、自ら考え主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する能力や、豊かな人間性、健康と体力などの「生きる力」を育成することを基本的なねらいとしております。

これからの 21 世紀に予想される変化の激しい社会を見通しつつ、これに柔軟に対応し得る子供たちとして、「生きる力」の育成が強く強く求められているのです。

私たち北海道国際理解教育研究協議会ではこれまで、国際理解教育の実践を通して「異文化理解」「共生の心」など、人間として豊かに生きる心を育むために、カリキュラムの編成や研修・授業改善への取り組み・「総合的な学習の時間」の実践への試行・各地区の研究成果の交流・全道研究大会の開催等を行ってまいりました。

これからの 21 世紀の国際理解教育に期待されていることは、子供たちに新学習指導要領で求めている「生きる力」を育むだけではなく、異文化を乗り越え世界中の人々と幸せに暮らしたいと願う「共に生きる力」を育てることだと考えております。この「共に生きる力」は、「地球市民の意識」でもあります。それは、自分も宇宙船地球号の乗組員の一人であり、同じ空でつながった空気を吸い、同じ海でつながった水を飲み、今の自分の生活は、自分一人の力で成り立っているのではなく、世界のみんなとつながり、支えられていることを意識できることなのです。さらにその意識は、誰もが皆自分と同じ暖かな血が体に流れ、自分と同じようにたえず幸せを求めている人間なのだと言う、『人間愛』に支えられた豊かな人間性なのです。この『人間愛』こそが、私たちが子供たちに育てなければならない「共に生きる力」の基盤となるのもであり、教育が求めている不易なるものではないかと思うのです。

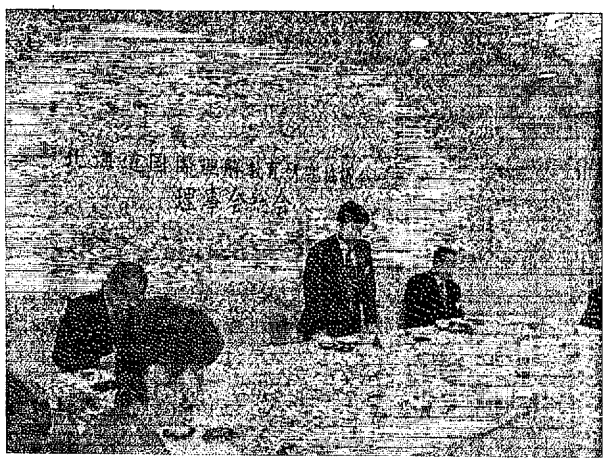
私たちはこれからも国際理解教育を通して子供達に、不易なる『人間愛』を育んでいかなければならないのです。

さて私はこの度都合により、３年間勤めさせていただきました会長を退任させていただくことにいたしました。非力な私が会長という大任を果たすことができましたのは、全道の会員の皆様の温かなご支援と、各地区の会長様の絶大なご協力の賜と感謝申し上げます。

新しい教育の花形として注目されている国際理解教育の先駆者、そして推進役として北海道国際理解教育研究協議会がますます発展いたしますことを祈念いたしまして、退任のご挨拶とさせていただきます。

平成１４年度

北海道国際理解教育研究協議会 理事会総会開催



平成１４年度の北海道国際理解教育研究協議会理事会総会が、１月１２日（土）にホテル札幌会館を会場に開催されました。当日は、事務局と各地区の理事の方々併せて２０名あまりが出席され、次の案件について、審議決定されました。また、第２３回全道大会十勝・帯広大会準備状況について、公開授業会場校の帯広市立花園小学校久門好行校長先生から報告があり、たくさんの参加をお待ちしていますとのお話がありました。

理事会総会と平行して各地区の研究担当者による研究担当者交流会が行われました。そこでは、各地区での実践報告と共に、第６次研究の成果と１４年度から始まる第７次研究についての検討が行われました。

次期会長に真木孝輝氏を選出

理事会において本会の次期会長選出について審議が行われました。その結果、現在の事務局長札幌市立もみじ台小学校長真木孝輝氏が選出されました。

■報告事項■

（１）平成１３年度の会務報告
（２）平成１３年度の各部活動報告
（３）第２２回全道研究大会札幌大会について
（４）第２３回全道大会十勝・帯広大会準備状況について
（５）平成１３年度「派遣教員・帰国教員報告会」について
（６）その他

■審議事項■

（１）平成１４年度の本会の運営計画について
（２）平成１４年度の本会の事業計画について
（３）平成１４年度の各部の活動計画について（４）平成１４年度の予算案について
（５）会長選出
（６）その他

約２時間の短い時間の中での審議でしたが、今回は、大幅に時間を延長して出席した理事から各地区の活動の様子を紹介し合う時間が持たれました。簡単ですがその中からいくつか紹介したいと思います。

・授業研究をし、紀要を毎年作っている。地域交流をしていくことが大切と考え「世界を知る会」と題してこれまで８回くらい実施している。派遣教員夫婦の交流会も行っている。派遣教員の学習会も実施するなど管内の交流を活発に行っている。　（上川・旭川）

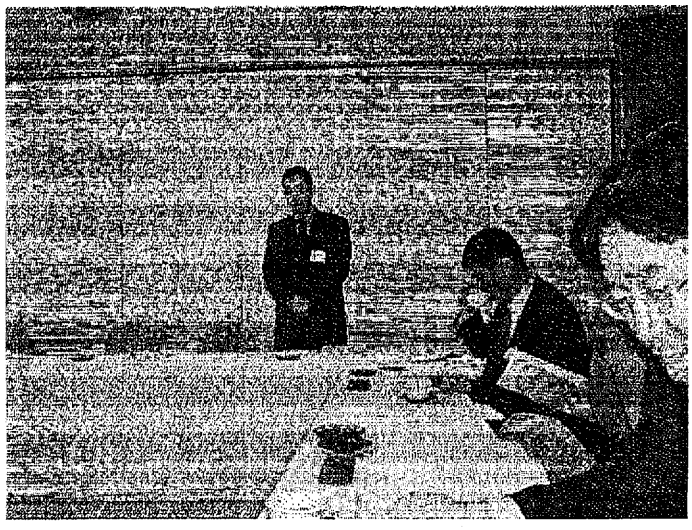
・帰国報告会と授業研を毎年行っている。授業研では、若い先生方が頑張っている。
（胆振・室蘭）

・短期派遣や個人で海外に行かれた方も含めて会員を広める活動をしている。帰国して長年たった「小豆の会」を立ち上げ古い話もあるが、２か月に一度帰国報告会をし、現在までに十数カ国行っている。　（十勝・帯広）

その他釧路・根室・石狩・後志地区などの理事からも帰国した派遣教員は必ず授業を公開していますという紹介や学習会そして授業研を毎年実施していますという紹介がありました。また教員以外からのエキスを吸収することも大切ではないかという意見があり、札幌からは、大学の先生や一般の教員以外の会員がいて一緒に活動していることも紹介されていました。

理事会総会の審議事項も終わって最後に、来年度から始まる第７次研究について、理事会出席者と研究担当者合同での協議も行われました。そこでは、研究内容や進め方について多くの意見が出されました。

その研究部から提案された内容について９ページにわたって載せてありますので、各地区及び会員個人におきましても検討の上いろいろな機会にご意見をいただければと思います。



第七次研究主題

北海道国際理解教育研究協議会　研究部

Ⅰ　研究主題　《 第七次研究　初年度 》

地球を見つめ，自分を見つめ
未来を切り拓く児童・生徒の育成

「地球村」で「地球市民」として責任をはたし，自信を持って生きていくために自分はなぜ、何のために、どのように生きていくかという未来への方位磁針を持つ子を育てる。

地球との出会い、そして未来を学ぶ学習の創造

地球との出会い	→	グローバルな視点	地球へと向かう旅
自分との出会い	→	共に生きる	自分へ向かう旅
未来への行動を学ぶ	→	価値ある問題解決	夢へと向かう旅

第六次研究の成果

共　生　の　心

他者とコミュニュケートする力

地球市民として生きる

異文化を理解する心

人間として行動する力

グローバル化した地球

空間、時間、そして問題のグローバル化

悩む子供たち

自分の未来を持てない、自分に誇りをもてない子供

Ⅱ　主題の背景

1　第六次研究の成果

第六次研究　主題

広く世界に目を開き、未来を切り拓く児童生徒の育成

(1)　国際化に対応した教育から地球市民を育てる教育へ

国際社会の中で日本人としての自覚を持ち、主体的に生きていく子供たちの育成をはかってきた。

この研究の中で、私たちは、「急速に進展する国際化」を積極的に受け止め、子供たちがグローバルな問題の解決へ積極的に参加し、共に生きることの重要性を実感する学びを創造してきた。そして、子供たちを、「地球市民」として、世界の人々ともに課題を共有し、人類の幸せ、そして、共に生きていく世界を作るために参加できるようにすることがこれからの課題であることを学んだ。

(2) 理解から生きる力へ

第六次研究の研究を通して、われわれは、地球市民を理解させるだけでなく地球市民としての生きかたを求めていくことがこれからの国際理解教育の基本であることを学ぶことができた。すなわち、今の地球がどんな状況であるがという理解にとどまることなく、地球という価値を持ち問題化解決にむけて行動できることが必要なのである。

そして、その生き方の基本になるのが「共生の心」「異文化理解」「コミュニュケーション」「人間として行動する力」の四つの資質・能力だといえる。

(3) 問題解決する姿の重要性

今回は主題実現にむけて「地球市民としての問題解決する姿」を授業の中で求め、子供たちが地域の中から見出した問題を自分なりに解決する姿を大切にしてきた。

この実践を通して、私たちは、子供たちの生活と地球を結びつけることを可能にしたといえる。子供たちは自分たちが生活する地域の「人・もの・社会」とかかわりながら、地球という視点から自分の地域を見直すこことができたのである。

特に今回の研究では、身近な生活の中から「異文化」を見つけ出し教材化してきた。このことにより、子供たちは自分の生活の中から問題を見出し、自分と他者との違いを理解し、その違いの中に潜む問題を克服していくことを学んだ。この体験を通して、子供たちは、自分がさまざまなかかわりの中で生きていることに気づくことができた。この気づきは、他者に対して働きかける喜びを作り出したともいえる。

2　第七次研究の背景

(1)　グローバル化する地球

international から global へ

ここ数ヶ月のトップニュースはアフガニスタンの問題である。ニューヨークでの出来事がライブで日本のお茶の間に飛び込んできた。また、インターネットで瞬時に地球のあらゆるところとつながることができるようになった。

このように、この社会はグローバル化という大きな波のうねりの中に存在しているといえる。

空間のグローバル化	相互依存する社会
	食料、経済など
時間のグローバル化	激しい変化の度合い
	インターネットの発見
問題のグローバル化	問題の地球化
	環境問題、貿易問題、

(2)　悩む子供たち　　学びからの逃走

荒れる学校という言葉に続いて「学力低下」を危惧する声がマスメディアを中心に広がり始めた。文部科学省も当初は反論していたが、「基礎学力の徹底」を打ち出し、学力向上にむけて学力テストの実施など実態の把握にさまざまな方策を取り出した。

年度末に出された国際教育到達度評価学会の報告によると、日本の小中学生の学力はトップレベルを維持しているといわれている。しかし、われわれが問題にするのは、その質の問題である。

①　基礎的な内容に関しては高得点であるが、創造的な思考、発展的な思考、表現する力は弱い

②　勉強に対して意欲を感じる子供の減少　６５．１→２３．８

　　勉強したくない　　４．６　→２８．８

　　☆　中学生の勉強の意欲　１９６５→２０００

また、子供たちの道徳観を問題にした調査では、未来に対するする夢では日本の子供は一番否定的であり、今の楽しさを追及する傾向にあることを指摘している。このように、かっては自分の夢を実現する手段として学びが存在していたのに、その学びから逃げ出している子供たちの存在を我々は認識しなければなりない。また教師としてその責任の重さを自覚しなければなない。

では、どうすればこのような状況を打破できるであろうか。特に今年の四月からは新しい教育課程が実施されようとしている。「総合的な学習」、絶対評価など新しい学びへ

の転換を迫られている。このようにわれわれは「学力」そのものに対する疑問にたいして回答することが求められている。

たとえば次のような学力の考え方も主張されるようになった。

佐藤　学　(東京大学)

Care	心を砕く	心を打たれる。自分に、ものに生き物に見えないものに心を打たれる
Concern	知的好奇心	他者への関心を持つこと。探求すること
Conection		つながりを理解する。つながりの中に物事が生きている。

ハワード・ガードナー　(ハーバード大学)

多重知能理論

知能とは、情報を処理する生物心理学的な潜在能力。ある文化で<u>価値ある問題を解決したり成果を創造</u>したりするような、文化的な場面で活性化されることができるもの

言語的知能、論理数学的知能
音楽的知能、身体運動的知能、空間的知能
対人的知能、内省的知能、博物的知能

⇒ 一人の人間の **知能**

では、われわれはどんな力に注目しなければならないであろうか。佐藤氏とガードナー氏の提案から二つのことが読み取れる。

まず、ひとつ目は他者とのかかわりに注目していることである。他者とどうすればかかわりを上手につくりだすことができるのか、人とのかかわりを作る術を一つの人間の力として考えていることである。また、このかかわりは、自分だけで終わらせるのではなく、みんなと共に暮らす社会のために無数の他者とのつながりを求められているといってよいだろう。

二つ目は「内省」ということである。自分自身を理解する能力とも言ってよいかもしれない。さまざまな情報を受け入れながら（当然感情も含めて)しっかりと自分を見つめることができる力である。

このように、われわれの研究は、子供たちの学びの現状を真摯に把握しながら、子供たちとともに新しい学びの姿を創造することを目指さなければいけないのである。

地球を見つめ、自分を見つめ、未来を切り拓く児童・生徒の育成

(1)　主題設定にあたって

第六次研究では、子供たちが「地球市民」としての生き方を「異文化」とのかかわりを通して特に「地域と世界」とのかかわりに注目して研究を進めてきた。

そこで、第七次研究では、子供たちと地球とを積極的にかかわらせながら「地球市民」としての自己を確立し、未来に責任のある行動ができる地球市民としての生き方を育んでいくことにする。

すなわち、「地球村」に「地球市民」として責任をはたし、自信をもって生きていくために、自分はなぜ、何のために、どのように生きていくかという未来への方位磁針を持つ子を育てることを研究のねらいとするのである。

地球を見つめ、自分を見つめとは

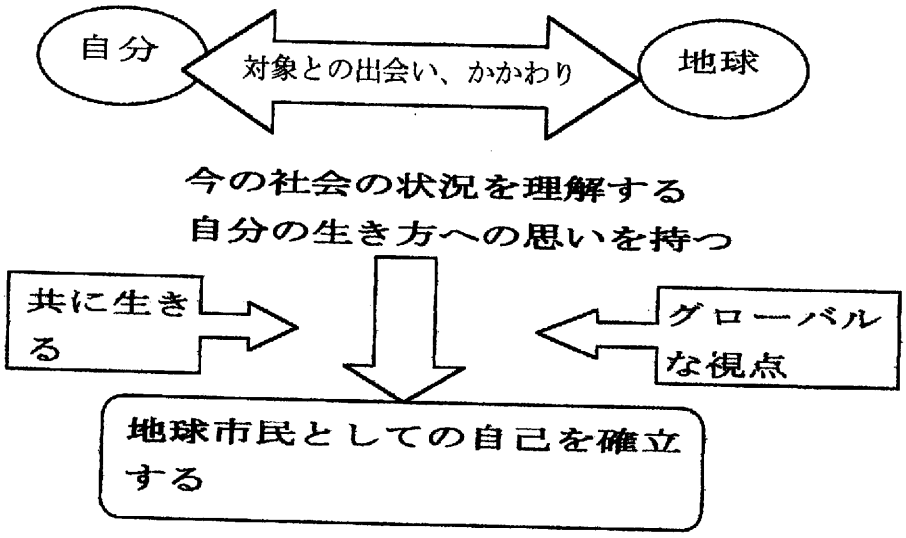
現代のグローバル化した状況において、子供たちは、その状況をしっかりと認識し、グローバル・イシュー（地球規模の問題）を自分の問題として捉え、その解決にむけて自分なりに行動しなければならない。

子供たちは、地球を見つめることで、グローバルな視点で今の社会状況を理解しながら、今の自分が地球上のさまざまなものとかかわりながら生きていることを理解するのである。そして、地球で起きている問題を今の自分の生活と結びつけることを可能にするのである。

また、さまざまなものとかかわりながら、子供たちはかかわった対象や他者と対話を通して自分を見つめることになる。そして、自分を見つめることで、子供たちは多様な生き方と出会い、自分と対象を比べながら、どの生き方にも同じように価値があること、そしてどれも大切にしなければならないことを自分自身で価値付けいくのである。

このように、自分の生き方に価値を見出した子供たちは、ひとつのものの見方や考え方にとらわれることなく、違いを認め、他者を尊重することができるようになる。

こうして、子供たちは、問題解決に当たって、共通の目標を持ち、共に学び合いながら、地球市民としてグローバル・イシューの解決に向けて前進していくのである。

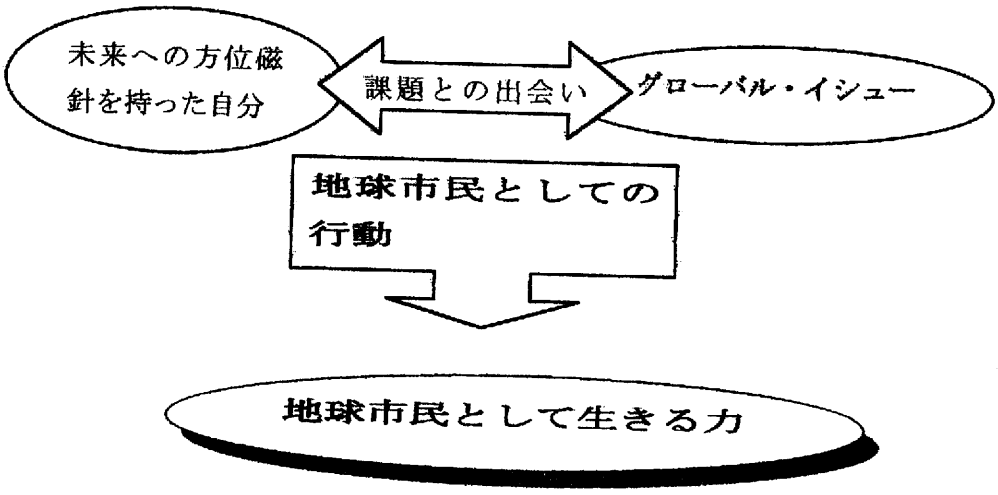


未来を切り拓くとは

子供たちが、これから生きていく２１世紀はどんな社会であろう。予想をたてることは非常に難しい。

「未来を切り拓く」とは、このような社会状況にあって、「地球市民」として生きていくためには、自分はなぜ、何のために、どのように生きていくかという未来への方位磁針をもち行動していくことが必要だとかんがえたからである。

世界を見つめ、自分を見つめることで、今、自分が生きている社会をしっかりみつめ、地球市民として生きていくことに自信をもった子供たちは、自分への方位磁針を持つことで、「地球村」に生きていく力を身につけ、よりよい未来を目指して、様々な問題の解決に向かって行動を始めるのである。



（2）　主題実現への道

第６次研究（平成１１年から１４年）では、「共生の心」を持った子供たちが、地球市民という立場から、どう問題を見出し、働きかけ、そして問題を解決していくかという問題解決の過程に注目して研究を進めてきた。

そこで、第７次研究では、この「地球市民としての生き方」を育んでいく研究をさらに一歩進め、子供たちが地球とのかかわりながら、地球市民としての自己を確立していく過程を、子供たちの問題解決の姿の中にもとめながら研究を進めていくことにする。

めざす子供の姿

地球市民として問題解決する姿

地球市民として、異文化を尊重しながら、地球上の全ての人々ともに地球の未来のために責任ある行動ができる子を育てたい。

特に次の２点に姿に注目する。

○　問題解決が地球市民として価値あるものであるか

○　問題解決の過程の中で、子供たちは共に生きることを学んでいるか。

めざす授業の姿

地域から地球とのかかわりを求めて

私たちは子供たちが問題解決をしていく姿に注目していく。そのため、授業においては、「何かを理解させる」というように知識の量や結果より、問題解決の中で子どもたちが悩みながら一歩一歩解決への道を歩むプロセスを大切にしていきたい。

特に、共に生きることを学ぶためには、多様な考えを持つ人と出会い、その違いを乗り越えながら、共に目標を作り、そしてみんなが共に納得できる解決への道を歩むこと大切だといえる。そのため、授業の中では、教室の中だけではなく地域、そして地球へと広がるネットワークの中で解決にあたりたい。

そこで、今研究では子供たちと地域のかかわりに注目したいと考える。地域を学びの場とすることで、子供たちは現実の問題に直面することになる。学びの有効性を実感しながら、自分と地域、そして地球を見つめさせていきたい。

研究の視点

視点1

子供と地球とのかかわりを作る教材づくり

子供たちは、すぐにグローバルな視点から物事を見つめることは難しい。われわれが繰り返し地域と地球とのかかかわりから「地球」に思いをめぐらす瞬間を、子供たちに体験させるようにしなければならない。

この体験を通して、子供たちは、自分中心の見方から、違いを違いとし、違いを豊かなものとしてとらえる相対的な視点、そして、すべての「人・もの」を共に地球に存在するものとしてみる地球的な視野へと育っていくのである。

このように、身近な地域を教材化することで、子供たちは「自分」と「地球」を出会い、地球市民として。さまざまな人と共に暮らすことができる力を育むこととができるのである。

教材作りのポイント

私たちが、子供に出会わせたいと考えている問題は、地域の問題でありながらその背景には地球レベルでの広がりが内在しているものである。また、子供たちの学習での取り組みでは、知識の量を求めるのではなく、問題を追求する過程と解決にむけての行動を大切にしなければならない。

ポイント1

追求の対象は、子供の生活の中に存在する。そうすることで子供たちは問題を自分ごととして捉えることができる。そして、繰り返しかかわることで、自分で調べたり、調査したりしながら、自ら問題解決にあたることができる。

ポイント2

子供の認識と行動の連続性を図ることが求められている。したがって「発見→判断→調査・問題解決→行動」という連続した活動が連続して構成されなければならない。

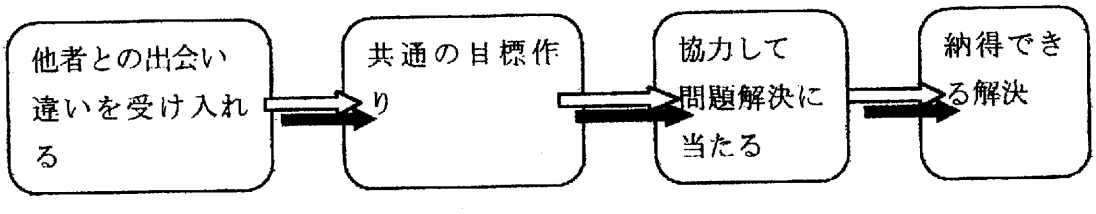
視点　2

地球市民として問題を解決していく学習活動の構築

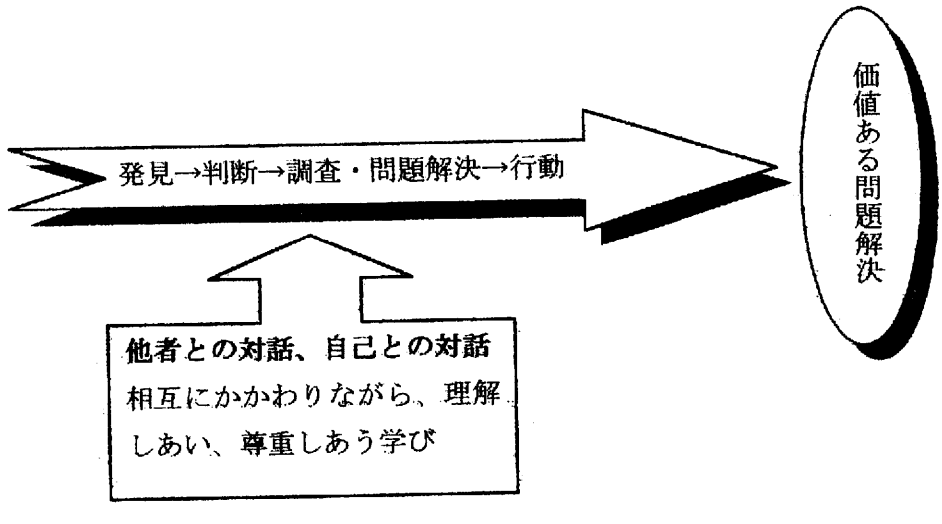
未来を切り拓いていく子供たちを育てるためには、子供たち一人一人が、問題の状況を理解するだけでなく、問題について、自ら解決方法を見出し、行動していくことが求められる。

また、これからのグローバルな社会では、まったく違う利害を持った人々との問題解決が求められる。

共に生きるための問題解決



そのため、今回の研究では、問題解決が地球市民としての視点をもっているばかりでなく、その問題解決の場においても上記のような共に生きるための問題解決が行われていたかも注目する。



平成１３年度
派遣教員研修会及び帰国教員報告会

平成１４年１月１２日（土）、ホテル札幌会館を会場に平成１３年度の派遣教員研修会及び帰国教員報告会が開催されました。これは、平成１４年度に在外教育施設派遣教員として本道より派遣される教員に対し、在外教育施設や教育の様子、現地での生活の様子および派遣に関わる準備等について研修し、派遣教員としての自覚の光陽及び資質の向上を図ることを目的として、北海道教育委員会の後援を得て、北海道国際理解教育研究協議会が主催して毎年実施しています。また、同時に行われる帰国教員報告会は、平成１３年度の帰国教員より、在外教育施設における教育の現状及び現地での教育実践等について報告及び協議を行うものです。

当日は、北海道教育委員会生涯学習部小中・特殊教育課指導班主査の菅沼肇様と指導主事の山田浩人様ご来賓としてお迎えし、開会式が行われました。

開会式に引き続いて行われた全体研修会では、前北海道国際理解教育研究協議会会長の山内武道様（ばんけい幼稚園園長）の講話があり、ボンベイ日本人学校校長としての経験から～世界の中での日本人として教師としての自覚を～というテーマで在外教育施設での教育に関すること、現地での生活面や病気に関することそして保護者や企業・在外公館の人たちとの付き合い方などについて話されました。

その後約１時間半にわたって帰国報告会が地域別に３つの部会に分かれて行われました。帰国された先生方からは、現地での教育の様子やご自身の実践について詳しく報告がされ、出席者からもたくさんの質問などが出されていました。

さらに３時半過ぎから行われた１４年度派遣地域別研修会では、これまで派遣された先生方を助言者として出発までの準備や現地での生活面でのことなど具体的な助言があり、派遣予定者の先生方からも心配事や心がけなどについて質問が出されていました。

なお、平成１４年度派遣教員内定者は、校長派遣２名、教頭派遣２名、教諭１２名の合計１６名です。（１月現在）在外教育施設派遣内定者の先生方には、日本とまったく違う生活環境の中でのご苦労もあるかと思いますが、健康に留意されて活躍されますことをご期待申し上げます。

平成１４年度
派遣教員

平成１４年度　在外教育施設派遣教員

所　　属	職名	氏　名	派　　遣　　先
士別市立武徳小学校	校長	菊地　政幸	ペナン日本人学校
道教育庁日高教育局	校長	時田　平治	ブカレスト日本人学校
伊達市立関内小学校	教頭	中村　直之	台北日本人学校
札幌市立和光小学校	教頭	継田　昌博	シンガポール日本人学校
厚田村立発足小学校	教諭	東峯　宏紀	プラハ日本人学校
恵庭市立若草小学校	教諭	今井　千裕	香港日本人学校
千歳市立長都中学校	教諭	野澤　孝志	メルボルン日本人学校
知内町立涌元小学校	教諭	加賀谷育子	香港日本人学校大補校
共和町立共和中学校	教諭	岩谷紀代美	ロッテルダム日本人学校
喜茂別町立喜茂別中学校	教諭	花坂　しず	ジャカルタ日本人学校
南幌町立南幌中学校	教諭	竹内　結美	シドニー日本人学校
富良野市立富良野小学校	教諭	虻川　康士	ニューヨーク日本人学校グリニッジ校
陸別町立陸別小学校	教諭	下舘　史嗣	ソウル日本人学校
中標津町立中標津中学校	教諭	村上玄一朗	バンコク日本人学校
札幌市立みどり小学校	教諭	岩村　鋭介	ロンドン日本人学校
札幌市立西岡南小学校	教諭	福田　栄喜	ミュンヘン日本人学校
上磯町立上磯中学校	教諭	大橋　宏朗	コロンバス補習授業校
美瑛町立北瑛小学校	教諭	堀内　隆功	イスラマバード日本人学校
釧路市立日進小学校	教諭	山本　和浩	ジョホール日本人学校
教育大附属札幌小学校	教諭	菅野　英人	シンガポール日本人学校

また、子供たちの姿を憂う記事が掲載された。筑波大学の遠藤誉教授らのグループが行ったものである。教授は、中国、韓国、そして日本の中学校三年生を対象にして歴史認識と生活意識を調べた。

その中で、自分の国に誇りを持っているという生徒は、中国で92%、韓国で71%。日本は24%にとどまった。また、自分の将来について中国で91%、韓国で46%が「大きな希望がある」と答えたのに、日本では29%にとどまったのである。

この調査と、子供たちのリテラシーを調査したＰＩＳＡの２０００年国際結果報告（この調査で、日本の子供たちの数学的、科学的リテラシーが一位グループであると報告された。）と比べると、日本の子供たちの状況が浮かび上がってくる。すばらしい能力を持ちながら行き先を探して彷徨っている難破船のような子供たちの姿である。

いつから日本の子供たちは、未来について、そして生きることに関心をしめさなくなったのであろうか。どうしてだろうか。

この答えを見つけることは容易なことではない。四月から始まる新しい教育課程の中で、も「生きる力」を育てることが最大の目標に掲げられているように、今の教育にとって最大の課題だといっても過言ではない。しかし、「基礎・基本」の重視という背景から生きる力の「力」が特に注目を浴びつつある。これでは、現状を救くえない。国際理解教育を学ぶ我々が地球市民としての生き方を問うことで「生きる」ことと「力」を結びつけ本当の「生きる力」を子供たちに問うことが絶対必要なのである。

図　書　紹　介

世界がもし１００人の村だったら

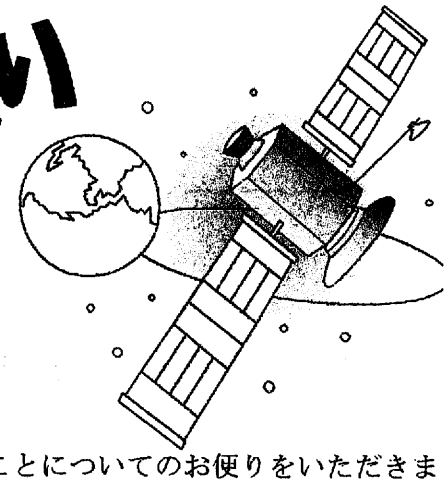
マガジンハウス

池田香代子　再話　　Ｃ．ダグラス・ラミス　対訳

ベストセラーとなっている。なぜ数十ページしかない絵本が人々の心をつかんだのであろう。

ニューヨークの事件、グローバルな社会、インターネット、この複雑な社会を100人という数字の中に閉じ込めたからではないだろか。確かに全ての問題を100人という数字の仲に閉じ込めてしまうのは無理があり、ある意味危険な試みもかもしれない。しかし、この本の最初のページにのっているように「今いるところが、こよなく大切だとおもいますか？」にこめられた「今」をしっかり見つめようとそして、この地球を学んでいこうというメッセージには深く共鳴する。

海外からのお便り



今回もハノイ日本人学校の武山先生からベトナムのことについてのお便りをいただきましたのでご紹介します。

ハノイ通信　平成１４年１月１９日（土）発行

も～う　いくつねると　お正月♪

日本ではお正月気分も終わり、いよいよ来週あたりから３学期というところが多いのではないでしょうか。

ハノイ日本人学校も、元日をはさんで２週間弱の冬休みがあったのですが、街の雰囲気はほとんどお正月らしさ感じさせるものはありませんでした。というのは、ベトナムの場合、旧暦で正月（テト）を祝います。今年の場合は、２月１２日が旧暦で元日になりますから、今はそれに向けて町中はいろいろと飾られています。新しいカレンダーや、正月のかざりつけ。「A HAPPY NEW YEAR」の文字や新しいベトナムの国旗の掲揚等々・・・ベトナムにお正月が来ましたら、その様子をまたご紹介いたします。

中国の空気は・・・

さて今回は、冬休み中に出かけた中国との国境の町ランソンを紹介させていただきます。

ランソンは、ハノイから北へ向かって車で２時間半ぐらいの小さな街。中国まで数キロということで、中国人がいっぱいいました。街の雰囲気は、ハノイとさほどかわりませんでしたが、市場がちょっと違っていました。ハノイではあまり見ることのできない中国製品がいっぱい。中国の人形、雑貨、電気製品、そして、漢方薬っぽい薬の数、見ているだけで中国を感じさせられました。（私自身一回も中国には行ったことがありませんが）

ランソンに行ったついでに、陸の国境はどうなっているのかと思い、その国境ゲートまで足をのばしてみました。するとそこには、道路の両側に荷物を山のように積んだトラックが数１００台数珠繋ぎのように入国審査を待っていました。中国との国境ということで厳重な警戒態勢がしかれているのかと思ったのですが・・・。

北海道できのこ採りに山に出かけるとよく見かける入林許可書がないと入れない山道にあるゲートのような感じでした。夜ならちょっと回り道をするといくらでも中国に入ることができそうな感じなのです。おもしろいものですね。

ハノイ日本人学校　　武山　昌裕

２００２年２月
北海道国際理解教育研究協議会
事務局研究部

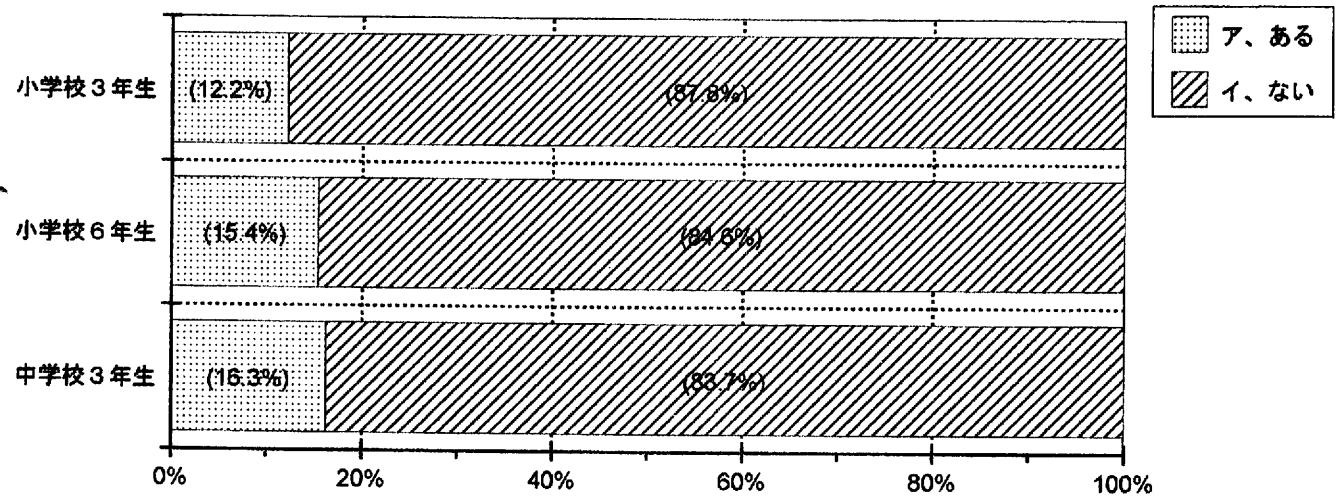
国際理解アンケート集計結果

北海道国際理解教育研究協議会事務局研究部では、今年度の一学期に国際理解教育についての意識調査を実施しました。調査は、札幌市内の小中学校を中心に全道の本会会員の学校を対象に実施しました。その結果下記のように多くの回答を得ることができました。まずは、アンケートにご協力いただいた会員の方々及び児童生徒のみなさんに感謝し、お礼申し上げます。なお、釧路市内の高等学校でアンケートを実施し、回答をお寄せいただきましたが、対象の生徒数が少なかったためこの集計結果には載せませんでした。

今回のアンケートの対象は、小学校３年生と、小学校６年生、そして中学校３年生でした。

小学校３年生 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・６７４名
小学校６年生 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１１１３名
中学校３年生 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ ３２５名

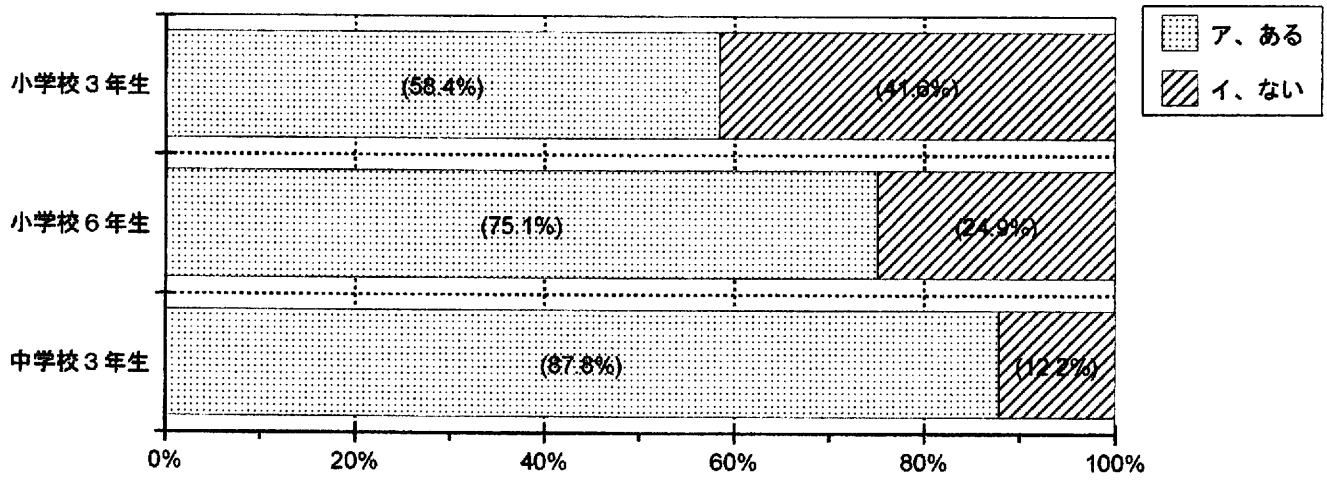
質問１，あなたは、今までに外国を訪れたり、住んだことがありますか。



質問１について

この質問では旅行か，住んだかはわからないがその多くは多分旅行で訪れたであろうと思われる。海外旅行は，今やその地域によっては、国内旅行よりも安い料金で行ける時代になっている。家族で海外旅行という人々もたぶん多くなっていると思われる。結果から小学生でも１割から２割近くの子が外国を訪れた経験を持っているということは、外国がより身近になってきているということができるのかもしれない。

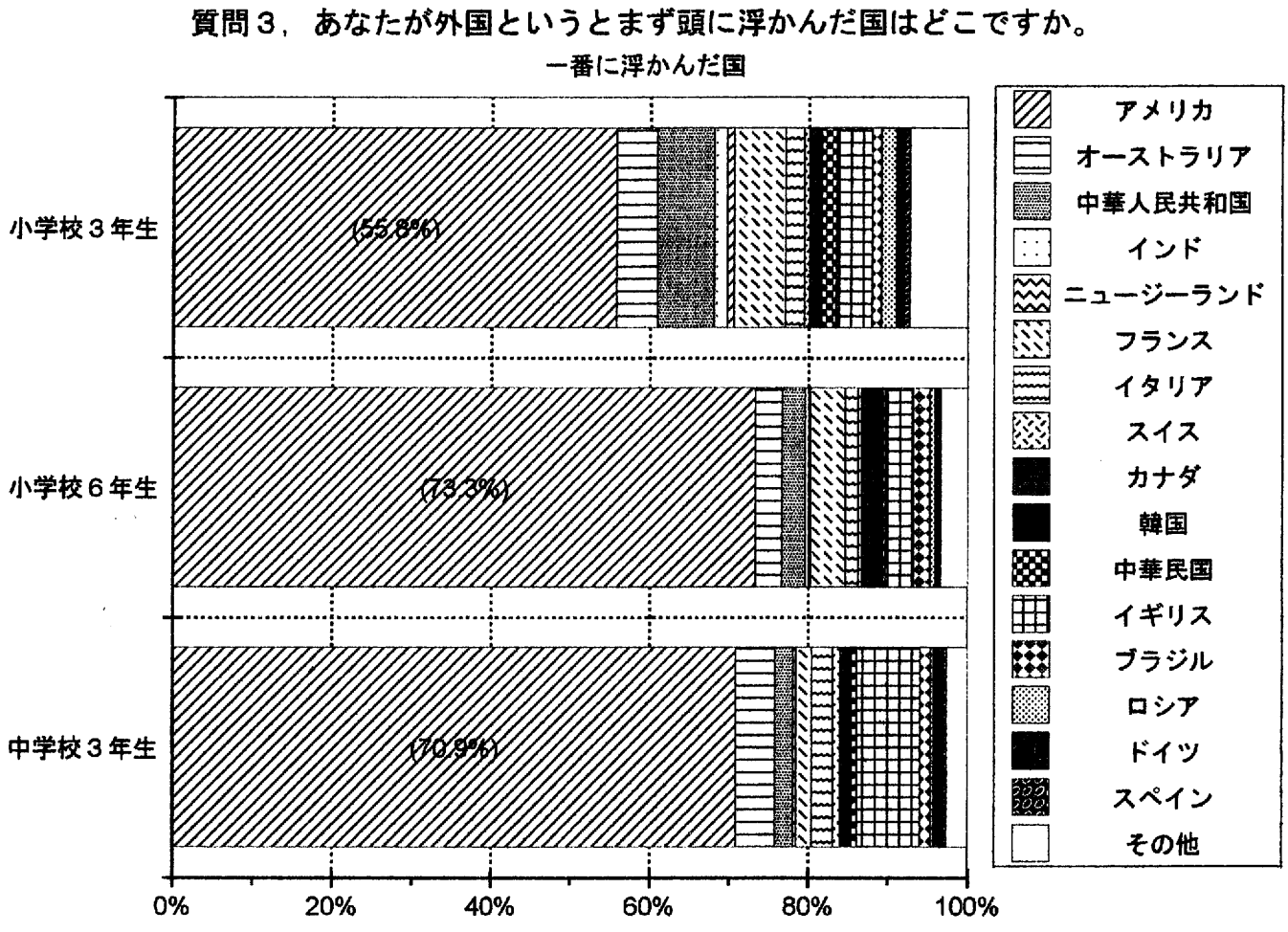
質問２，あなたは、今までに外国の人と話したり、勉強したことがありますか。



質問２について

小学校３年生でも６０％近くの子どもが「ある」と答えている。これが６年生では７５％、中学３年生になると９０％近くにまでなる。これは，学校における英語教育，特に中学に置いては ALT による指導も行われている現状を見れば高い数値になるであろうと予想できる。小学生については，総合学習の取り組みとして外国人を招いたり ALT による英会話授業を実施している学校も増加してきていることによるのかもしれない。また、ひとつには，英語塾等における外国人との出会いもかなり多いのではないかとも思われる。さらに，最近は外国籍の児童生徒も少しずつ増えてきていることもあり，日常的に話をしたり，一緒に勉強したりということも十分考えられることである。いずれにしても外国の人が小学校においても、中学校においても益々身近な存在になってきていることは間違いないようである。

質問３，あなたが外国というとまず頭に浮かんだ国はどこですか。一番浮かんだ国を教えてください。

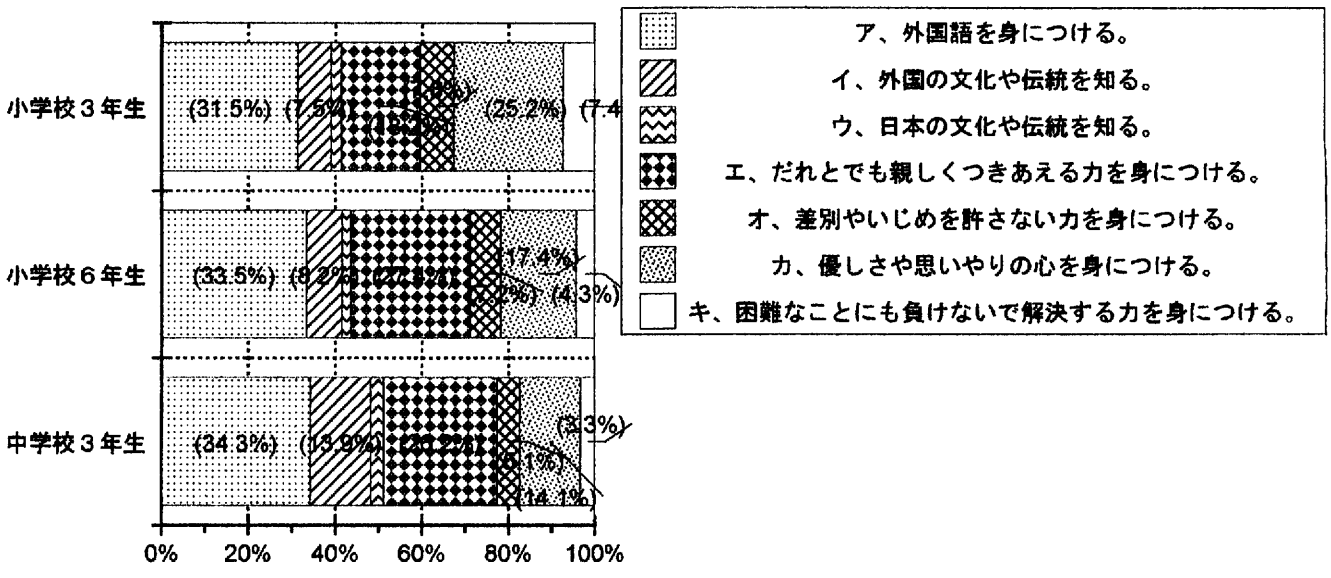


※その他の国・・・南ア共和国・カメルーン・ユーゴスラビア・エジプト・シンガポール・チリ・ケニア・トルコ・ガーナ・インドネシア・フィリピン・マレーシア・スウェーデン・キューバ・スリランカ・ブルガリア・ネパール アルゼンチン・ベトナム・ギリシア・オランダ・メキシコ・デンマーク・ポルトガル・パキスタン・アンゴラ・サウジアラビア

質問３について

この質問については，まず頭に浮かんだ国という聞き方をしていることもあって，子ども達にとってすぐ頭に浮かんだのはアメリカということになったのではないかと想像できる。わが国においてアメリカという国は、言葉はもちろんであるが、食べ物にしても音楽、スポーツにしても最も身近な国であることは間違いない。イギリスやフランスなどヨーロッパの国々が出てくるのもある程度予想がつくが，中国やオーストラリア、韓国、中華民国などが多くあげられているのは、最近私たちの生活の中にそれらの国々からの衣類や食べ物などが数多くあり、このような輸出入品等の関係で身近な国になってきているのではないかと思われる。さらに、サッカーに関係した国々も多く登場しているように思われるが、これは、２００２年にワールドカップが開催されるということでサッカーブームということとマスコミ等によって耳にしたり、目にしたりする機会が多くなったことも原因しているのではないかと思われる。

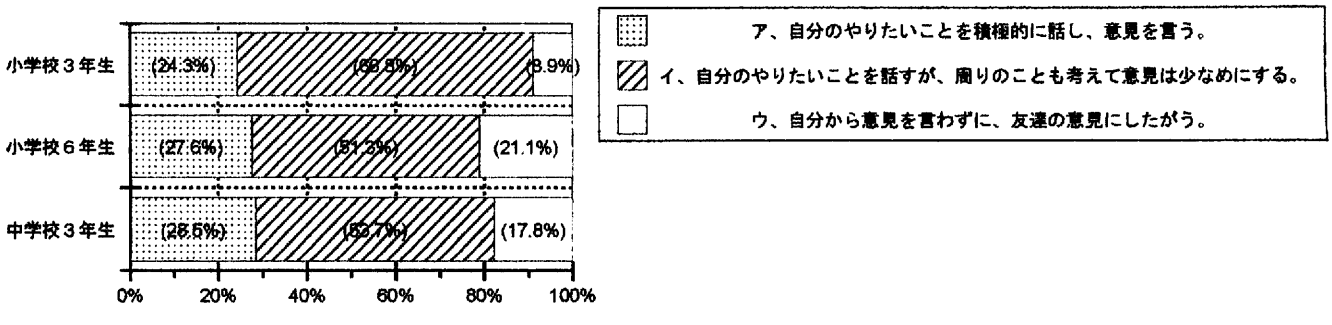
質問４，あなたが、外国の人々と友達になるにはどんなことを身につけることが大切だと思いますか。下の中から２つ選んで書いてください。



質問４について

この質問については、小学校３年生、６年生、中学校３年生とも３０％以上の子が外国語を身につけることをあげている。しかもそれは、学年が上がるにつれて高くなっていることもわかる。しかし、２番目以降の項目に目を向けると、学年によって微妙に違うのがわかる。それは、やさしさや思いやりの心を身につけることや、差別やいじめを許さない力を身につけることが、小学校３年生ではそれぞれ２番目、３番目多くなっているが、その割合は、学年が上がるにつれて少なくなり、反対に誰とでも親しくつきあえる力を身につけることや、外国の文化や伝統を知ることが多くなっていることである。

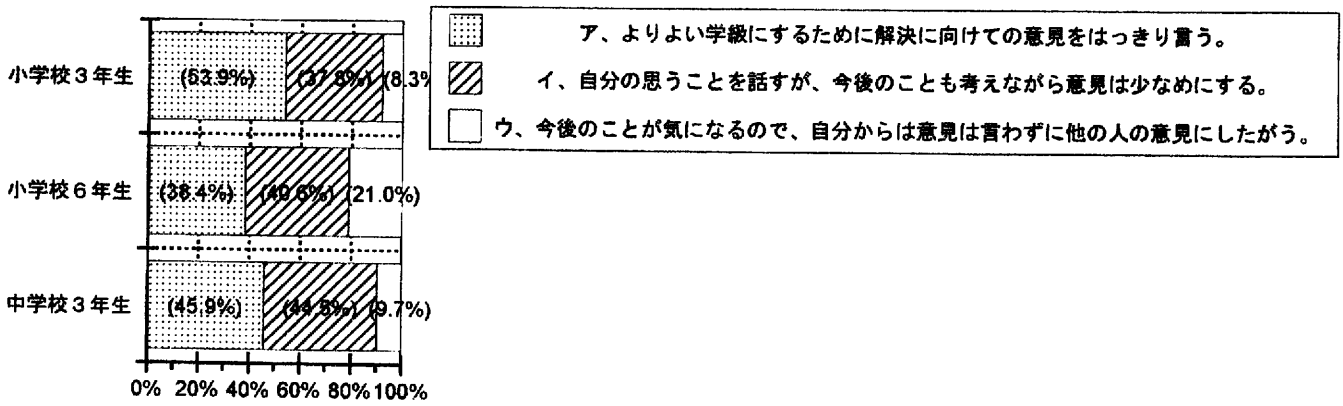
質問５，あなたのクラスで、学級レクリエーションを行うことになり、学級会を開いてその内容を決めることになりました。あなたは、その話し合いの場でどのような態度をとりたいと思いますか。



質問５について

全体的には、自分のやりたいことを話すが、周りのことも考えて意見は少な目にするが最も多く、積極的に話すも２０％から３０％近くに達していることがわかる。しかし、小学校６年生と中学校３年生は似た傾向がありそれは、小学校３年生と少し違っていることがわかる。それは、周りのことも考えて意見は少なめにするが減り、意見を言わずに友達の意見に従うの割合が多くなっていることである。特に６年生がその割合が最も多くなっていることがわかる。

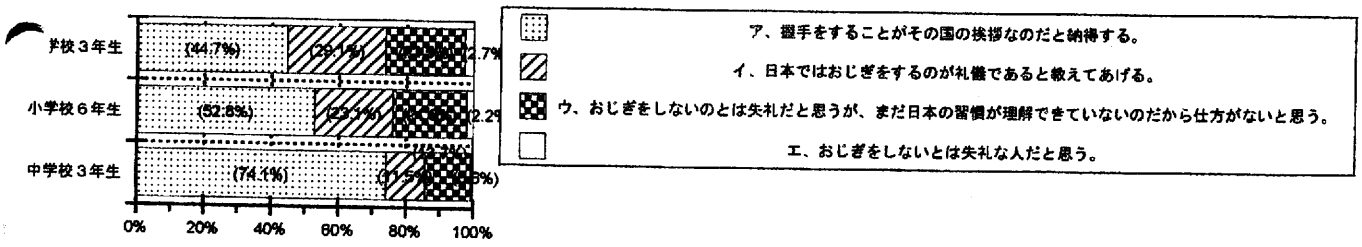
質問６，あなたのクラスで、あなたの知らないところでいじめがあったとします。そんな時にそのいじめを解決するために学級会を開いて話し合うことになったら、あなたはその話し合いの場でどのような態度を取ると思いますか。



質問６について

意見をはっきり言うと少なめにするが同じくらいの割合であるが、小学校３年生が意見をはっきり言うが半数を超えているのに対し、６年生では３０％台にまで減って反対に今後のことを考えて意見を言わず、他人の意見に従うが２倍以上に増えていることは大変気になるところではある。中学校３年生になるとそれがまた小学校３年生の割合に近くなることを考えると、小学校６年生が精神的に不安定な時期であることや自分の意見を積極的に言えない環境を作っている何かがあることが伺える。

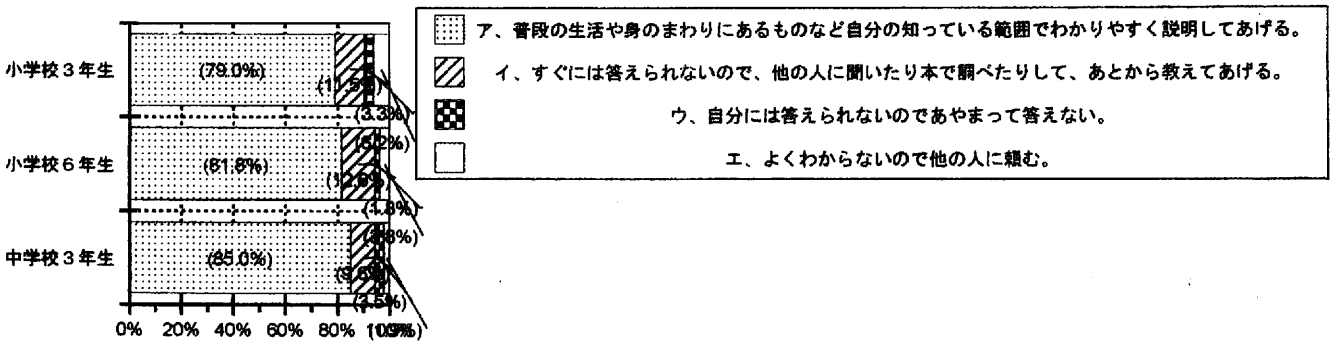
質問７，ある日、あなたの知っている人から、日本に来て間もない外国人を紹介されました。あなたは深々とおじぎをして挨拶をしましたが、相手は握手を求めてきただけでした。あなたはどう思いますか。



質問７について

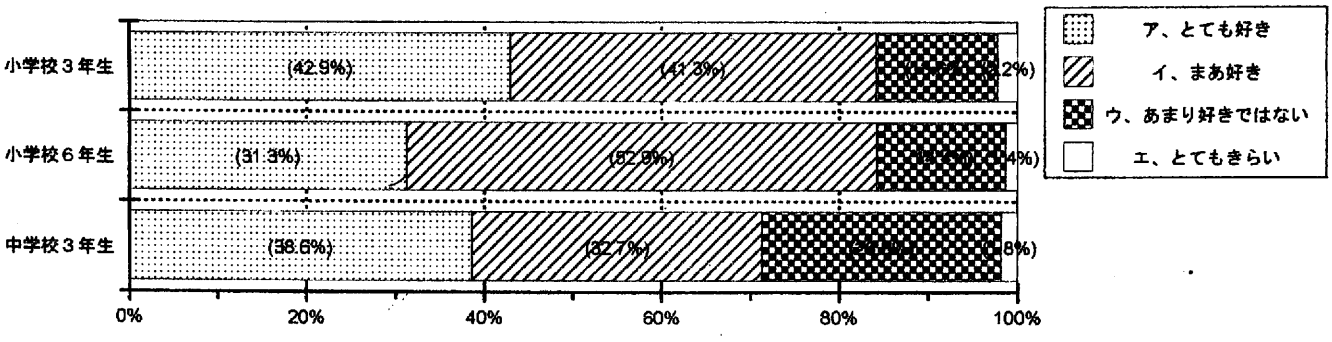
この質問については、学年が上がるにつれて、その国のあいさつというひとつの文化を理解し、失礼だと感じつつも仕方のないことと思うようになっているようである。逆に言えば年齢が低いほど習慣がわからないのなら教えてあげようという気持ちが大きいことが分かる。

質問８，外国人があなたの家に来ることになりました。「ニホン　ノ　コトヲ　オシエ　テ　クダサイ」と言われたら、あなたはどうしますか。



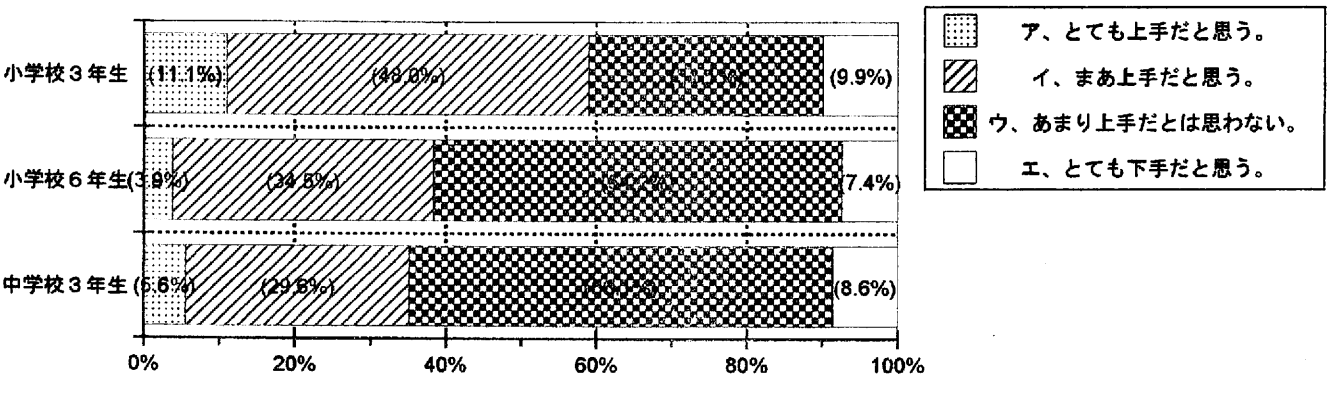
質問８について
　どの学年を見ても積極的に説明してあげようとする態度が感じられる。しかも学年が上がるにつれてその割合は高くなっている。

質問９，あなたは人の話を聞いたり、人に話したりするなどコミュニケーションをとることが好きですか。



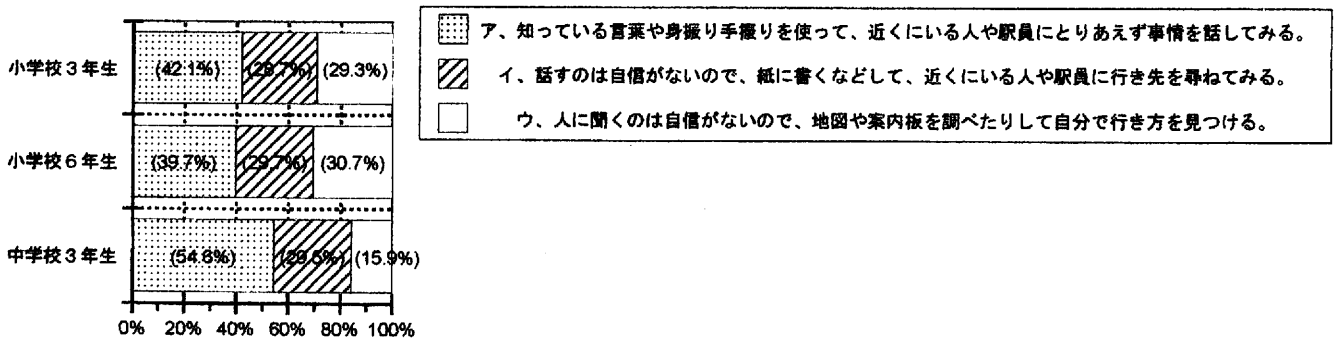
質問９について
　人とのコミュニケーションについて小学生は３年生、６年生とも８０％以上の子がとても好き、まあ好きと答えている。これに対して、中学校３年生になるとあまり好きではないが小学生の２倍近くに増えている。６年生と中学校３年生を比べた場合は、とても好きが中学生になると増えるのに対して、あまり好きではない子も前述したように小学生の２倍にも増えているのは、そこに何か原因があるのではないだろうか。

質問１０，あなたは人の話を聞いたり、人に話をしたりするなどコミュニケーションをとることが上手だと思いますか。



質問１０について
　コミュニケーションが上手だと思っている子は、小学校３年生で６０％近くいるが、小学校６年生になるとその割合が２０パーセントも減少してしまう。反対にあまり上手だと思っていない子が全体の半分以上にもなっている。さらにこれが中学校３年生になると益々その傾向が強く出ていることがわかる。またとても下手だと思っている子どももどの学年を見ても１０％近くいる。

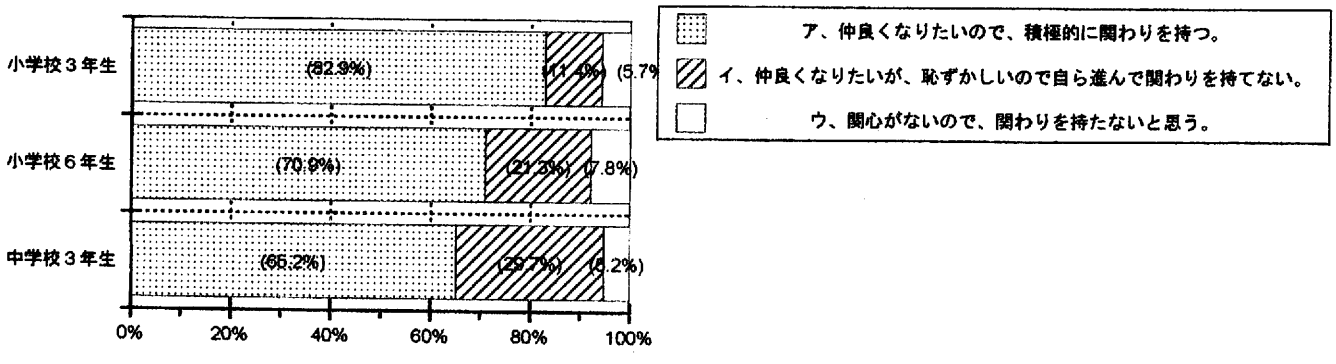
質問１１，ある外国へ旅行に行きました。駅まで来ましたが目的地への生き方がわからず困ってしまいました。その時あなたはその国の言葉がよくわかりません。さあ、どうしますか。



質問１１について

この質問に対しては、小学生は、話してみたり、訪ねてみたり、自分で見つけてみたりすると答えた子がそれぞれ３０％くらいずつに分かれている。これに対して、中学校３年生では、話してみようとする子が半分以上に増え、自分で見つけるという子は小学生の半分に減っている。これは、外国語を学んでいるというだけでなく、外国の人と接する機会の多くなってきている中学生にとっても身振り手振りだけでも言いたいことが通じるという経験がどこかでなされているのではないかと思われる。

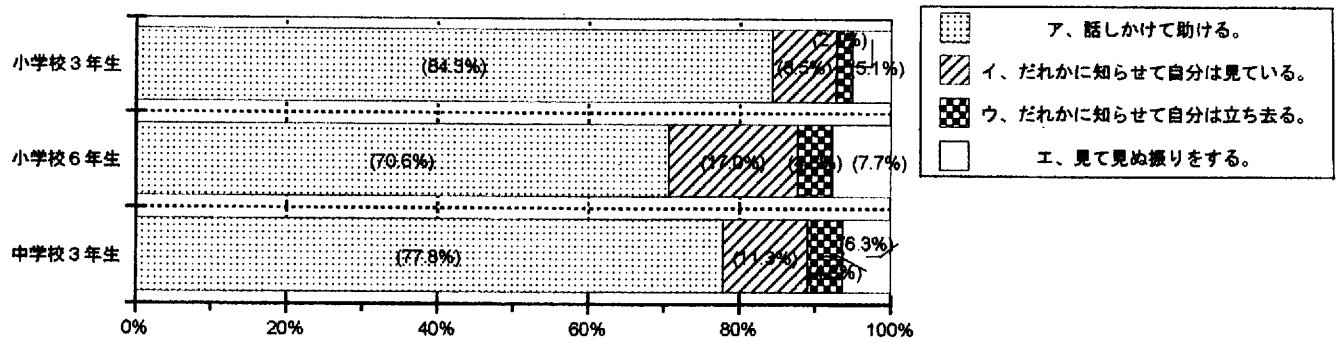
質問１２，あなたのクラスに外国人の転校生が来ました。あなたはどのような態度をとると思いますか。



質問１２について

これについては、年齢が低いほど積極的に関わろうとする傾向が見られる。特に中学校３年生については、３０％近くの子が仲良くなりたいが恥ずかしいのでと答えている。

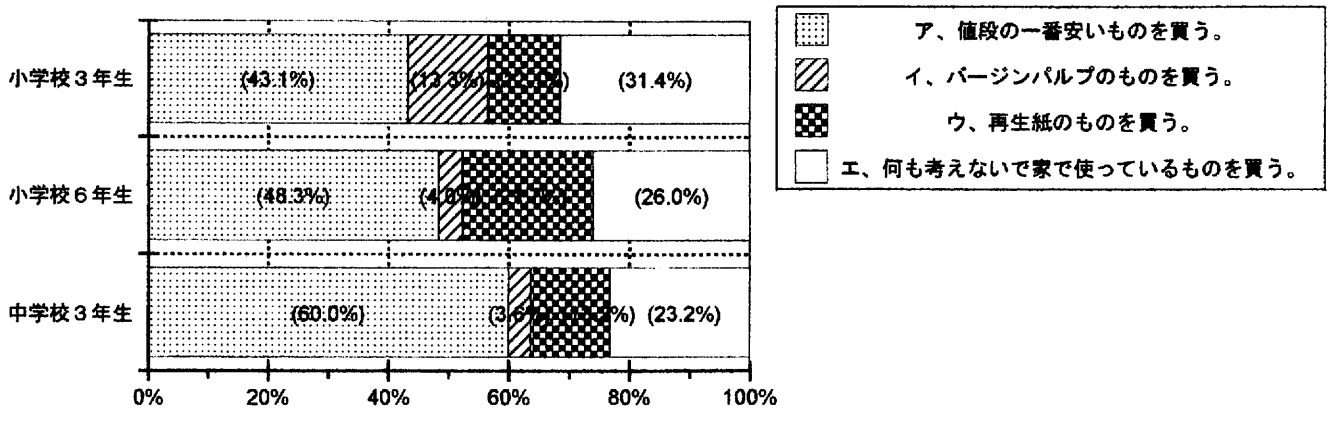
質問１３，車椅子に乗った外国人が困っています。それを見たあなたはどんな態度をとりますか。



質問１３について

困っている人という設定であるが、これについては、助けてあげると答えた子が８０％前後いることはその通りだろうと思う。しかし、この質問で気になるのは、小学校６年生の２０％以上の子がだれかに知らせて自分は見ているとか、自分は立ち去ると答えている点である。これは他の学年でも同じようにいるが、小学校６年生がなぜか自分は関わりたくないと思っている子の割合が多いのは気になるところである。

質問１４，トイレットペーパーを買うためにスーパーマーケットに行きました。どんなことをポイントに選びますか。



質問１４について

この質問は小学校３年生には、少しむずかしいかと思った。従ってやはり、何も考えないで家で使っているものを買う子やバージンパルプのものを買う子が多いようである。これが６年生になると資源の再利用や環境問題についても関心を持つようになるためか再生紙を買う子の割合が増えてくるようである。また、学年が上がるにつれてより安いものをという値段にこだわるところも見えているように思う。